京扇子・京うちわ

【産地組合】京都扇子団扇商工協同組合

（産地紹介）

扇の始まりは平安時代初期に遡ります。当時使用されていた「木筒」という木の細く薄い板を何枚かつなげて、現在の扇の形にしたものが始まりだと考えられています。薄いヒノキ板を重ね綴ったことから「桧扇（ひおうぎ）」と呼ばれる扇です。次に竹と紙で出来た「紙扇」が作られ、13 世紀頃には中国へ輸出されました。それがさらにヨーロッパへと伝わり、西洋風の扇になりました。ヨーロッパに根づいた扇がその後日本へ逆輸入され、「絹扇（きぬせん）」を生み出しました。

京うちわは、南北朝時代に、朝鮮団扇（ちょうせんうちわ）が紀州から大和を経て、京都の貴族の別荘地であった深草に伝わったのが始まりと言われています。柄が中骨と一体ではなく後から取り付けられる、挿柄という構造が、京うちわ独特のものに定着したのは江戸時代以降のことです。これは、宮廷のための絵を描く土佐派、狩野派等の絵師が絵を描いた「御所うちわ」が始まりと見られています。その後間もなく、庶民の使ううちわとしても広まり、今日の京うちわの基盤が確立されました。

良く吟味された材料の竹や紙を用いた、確かな手仕事から生まれる小さな工芸品には、表面的な美しさだけではなく、その風合い、持ち味等、実用品こそが持つ様々な「美」があります。

京うちわは、豊かな風土と文化・歴史に育まれながら、今日もなお作り手たちの技と心で常に新しいデザイン感覚を付け加えています。単に涼むための用具としてだけでなく、優れた美術工芸品として私たちの目を楽しませ、生活に華やかさと潤いを与えてくれます。